



平成24年7月九州北部豪雨(田籠地区)

歴史から学ぶ

恵みをもたらす雨。その雨はときに大きな被害をもたらすこともあります。今年も八月十一日から十九日まで降り続いた雨により家屋や道路、農作物などに多くの被害をもたらしました。過去の雨はどんな被害をもたらしたのか、過去の被害から学んでいきたいと思えます。

うきは市には、過去の災害を伝える石碑がいくつも建立されています。その中の碑文には、被害の甚大さを物語るものや災害への備えを後世に伝えるためのものが存在します。

被害の伝承と 備えへの警鐘



西屋形地区の山潮記念碑



江南地区の水害復興碑



大村復興碑



儲穀の碑

これらの記念碑には、古くは享保5年に起こった災害から「筑後川の三大水害」と呼ばれる明治22年、大正10年、昭和28年の水害についての記録が記されています。その記念碑の一つ、西屋形地区の山潮記念碑には「西屋形は、享保5年に山潮の災に遭い、227年を隔てて再び同じ災を被った。(中略)この機会に子孫に対して一言遺す。子孫は、先人の不屈の愛郷心を受け継ぎ、あらかじめ不測の事態に備え、困難に対処する覚悟を忘れるな。」と記されています。

うきは市には、現在205ヶ所の土砂災害警戒区域があります。大雨をもたらす梅雨期や雨台風のときには、耳納山地からの土砂災害に十分警戒することが必要です。

過去の災害の記録や先人の遺したメッセージを風化させず、今後の災害に備えていくことが重要です。災害はいつ起こるか分かりません。自ら出来る準備をして、災害に備えましょう。

なお、本記事を作成するにあたり令和2年3月発行の「災害は歴史に学び 逃げ遅れゼロ」(うきは市役所)を参考にしました。